

---

# GAME（ゲーム）～神々の遊楽～

間入糅管

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GAME～神々の遊楽～

### 【Zコード】

N2128Y

### 【作者名】

間入糸管

### 【あらすじ】

主人公は今年の春、高校生となつた。高校の寮に住むことになつたが特に嫌という訳ではなく、ホームシックにもならなかつた。しかしある日、実家に帰り、ノベルゲームをする。その時、主人公は「ゲームみたいに日常にも選択決とかがあれば、すっげー楽なんだけどな～」と考え始める。

そしてその日の夜、おかしな夢を見る。変に思いながらも、朝起きてみると選択決が出るようになつっていた！？

## プロローグ（前書き）

プロローグ短っ！と思ひながらの投稿。  
許してくださいお願いします。できれば音で頂けたらな、と思いま  
す。

## プロローグ

（クソシ、この場合どうすればいい。どの選択決を選べば最高のイベントシーンに行けるんだ！）

この心の声を聞いただけでは、パソコンの前でノベルゲームをやつてるようと思えるだろ？ だが、実際は違う。青年には見えていた。青年の目の前に浮かぶゲームのような選択決が。それは青年にだけしか見えないものであった。

（この選択決か？ いや早まるな。もしかしたらこいつらの選択決かもしれない。それともこっち？ ああ、もつひとつだ！ 今日の事を思い出せば何か分かるかも！）

そう思いながら、青年は今日の事を思い出し始めた

## プロローグ（後書き）

すぐに投稿します。頑張ります。

## 第一話 能力（前書き）

ふうー やつと投稿。まえがきつて以外に書けること少ないですね。  
それでは一話目です。

## 第一話 能力

ジリリリリ ツリリリリ

田覚ましの音が鳴る。田覚ましの設定は5時半、びつやう朝みたいだ。俺こと立花 九は意外に早起きなのだ。

(ん? 選択決か?)

起きる

起きない

寮から逃げる

(…………おこ、なんだ。この選択肢。ふざけんじやねえよ。なんだよ、寮から逃げるって!)

もちろん、皆さんなら起きる、を選択するだろう。だが

(むむ、悩むなあ。)

この選択決、最善と最悪、どちらに転ぶか分からない、といつ感じのものでできている。

まあ、時々選択肢が一つしかなかつたり、全部最悪に事が転んだりするのだが。

さて、なぜ立花がここまで悩んでいるかは、一度だけ起きないを選択したとき、クラスで人気の女子が起こしに来た、という伝説があるからである。

「やつぱつ……」

立花はそつ言いながら田原見ました顔を向けていた。その田原見ました  
起きた時と同じ時間のままだった。

「俺が選択決を選んでる間は時間はなづいかないんだ。ならばー。」

そつ言いながら、立花は寝始める。

(うつじつじつじつ。それなら選択決を選ばず寝とけばいいんだよ。  
)

その時、ペッとして音と共に、

起きる

起きない

寮から逃げる

勝手に選択決が選ばれていた事に気付かず……

「ふわあああ、よく寝たあ。さて選択決をつー?」

立花は虚空を驚きと絶望に満ちた顔でみつめる。

「ない!選択決がない!!いや大丈夫!我が眼前に出でよー!世界仰天不思議パワー!!」

だが出ない。

「ははは、嘘だろ……?てことは、遅刻だああああああーー急いで学校に行かなければ!」

選択決

朝飯を食べる

朝飯を食べない

そうだ、寮を出よつ

「朝飯食べる時間ねえよー!ていつか、そうだ、京都行こーう、的なノリで寮を出させよつとすんなああああああああああああああA A A A A

途中悲鳴がアルファベットみたいな発音になつたのは気にしない方  
針でいこうじゃないか！

「ん、 そ う だ サ ボ つ て し ま え ば。」

朝飯を食べる

そ、う、だ、  
察を出よ、う

三才圖會

「あれ？こんな選択肢あつたか？まあ、いいや。」

朝飯を食べる

卷之二十一

学校なんてサボつてしまえ！

「ふう、あの店うまかつたな。隠れた名店。ほかつたし。」

俺は学校をサボり外に出てから時間は経ち、夜飯を食つたところだった。選択肢に目の前の店に入る、というのがあったので、選択してみたらかなり美味しい料理店だった。

「これからもこの店行こうかな。」

そう思いながらいつも、学校に戻るルートとは違うルートで歩き出す。今日は、何故か遠回りして帰りたい気分だったのだ。

思えばこの時、選択決が出ていたのに気にせずこちらに行ってしまつたのが人生の転機だつたのかもしれない。

選択決

いつものルートで帰る  
寄り道しながら帰る

## 寄り道しながら帰る ひとつモノのルート

いつモノのルート  
寄り道のルートも嫌な予感がするから違うル

遠?りしな?り?みつ

「 プハあつ。 美味い。 やつぱり コーヒーは ブラックに限るよなあ。」

立花はケータイをいじくりながら コーヒーを飲み、その上いつもとは全く違うルートを歩いていた。

人間頑張れば 3 個の事を同時にできるものなのだ。立花はつまらないうことに頑張っているが。

立花はいつもと全く違うルートを歩き始めた時、重要な事に気がついた。それは、寮までの道筋が分からない、ということだった。その事に気がついた立花はケータイをとりだし、急いで地図を開いてそれを見ながら歩いているのだ。

そして、途中で見つけた自動販売機で買った コーヒーを飲み、今に

至る。

「それにしても、ほんつと選択決様様だよな。道を間違いかけたら選択決が出るじゃ。最高だよもつ。」

そつ言いながら首をかしげ、手を肩の高さまで上げた。

その時、突如頭の真横を、ゴウツー！と音を立てた明るいナニカが通り過ぎて行つた。

「アツレホ？ ゴメンネホ。君一回りよつて、そたわけジヤ、ないんだけじねホ。」

「おい！ また口調がおかしくなつてゐー！ ていうかなんだ、そたわけジヤつて！」

（おこおこお、おの数が一つ多かつたような氣もするがなんだアレは！？ ロスフレか？ ロスフレですか！ ロスフレなんですか！？）

その男は、ファンタジーを夢見る者なら一度は見たことがあるような、長い耳がついていた。

「え……エル、フ……？」

「ソ、エロフ。僕の種族はエロフだよン。」

「エロフって言つんじやない！ ちょっとアレな種族になるだりつ。」

「アレッてナーナー！ アレつて」

「え？ あ、アレはその……あれだ、あれ。」

「あれジャ分からないヨ。アレじゃ。」

「つまりだな、ああ～もう！アレはアレなのだ！だからもうあれでいいんだ！」

「コレ、何て言つんだっけ？シンデレラ～いや、ヨク使つてるけどソレデハないな。ジャ、なんだろウ。」

「あ、あの？」

「「ん？ ああ、君がそういうえばイタね。」」

「ちょっと！アンタがイタね、って言つたから私までイタね、になつてでしようがあ～！」

「知らなイヨ！ ソンマト～！」

「アンタ今日帰つたら日本語猛特訓！ 能力使つてやるわよ～！」

「エツ？ チヨツ、オマツ（笑）」

「……」

「どうかした？ おーい……ねえ聞いてる？」

「ああもうつ。そんなことよりアイツ、始末するわよ。」

「オーケヒ。」

「「つ～わけで死んで？」」

「何がつ～わけだ！」

「イイから死んでヨ。アソコの人みたイに、セ。」

そう言いながら、エルフの人は俺の後ろの方を指差した。

「セ、セ。」

え？ あそこの人？

そう思いながら後ろを見ると

「ひつ」

そこには、火で燃やされている、人間の首があつた。

「あ、あああ……」

無意識に俺は首からもエルフの人たちからも遠ざかつていた。

「イヤア、僕たちもサ、神々のGAMEに生き残りたくつテセア。能力者、殺そうとしたんだけど……ソイツ、自分の能力の気付いてなクツテサ、簡単ニ逃げるトコロを魔法で一発ドカン、とね。」

「そう、そしたらすぐ死んじやつたわ。」

「君も能力気付いてないのかな。」

能力……？なんだそれ。俺しらねえよそんなの。ていうか、魔法つてなんだよ。魔法はファンタジーの中だけの特権のはずだろ……ハハハ、ハハ、ハハハハハハ

人間、ここまでヤバいと笑えてくるもんなんだな。まあいい。逃げてもヤツが言うことが本当なら魔法にやられるだけだ。それならここで潔く死の

「……ちょっと、まで……」

「ハイ？」

「なつ」

「ちょっと、まで

どうして俺は奴らの言葉を信じる。神々のゲーム？なにそれ、おいしいの？な感じだよ。魔法？ただの電波かもしれない。エルフ？た

だの「スプレかもしないだろ、んなもん。

なら、何故だ？俺は特段不思議パワーは何も持つてない。それこそ仰天するようななんてあつたら、俺自分で自分を疑

仰天？不思議、パワー…………？

どこかで聞き覚えが…………！？

『ない！選択決がない！！』

違うこじやないその次だ。

『いや大丈夫！我が眼前に出でよ！世界仰天不思議パワー！…』

あつた！

そうだよあるじゃないか。俺にだつて不思議パワーが。電波なアレが！

「ク、ククククク

「今度はドウしたんでしょうか。」

「じょういかつて何？まあ、どうせ怖とかで狂つたんじゃないの？」

「狂つた？ハハまさか。」

「！！」

「ああ、そうかもしない。GAMEとか意味不明だけどさ。俺は能力もつてんのかもしない。」

だからや。もういいだろ？いい加減出してくれよ、選択決を。今危機的状況なの、分かる？分かるよね。だからマジで出してよ。もう俺GAMEとかのなんかでいいからさ。

### 選択決

自分で頑張つて倒す。

すばやく逃げる。

石を投げて逃げる。

クソ、いいのが全然ねえ！

（クソッ、この場合どうすればいい。どの選択決を選べば最高のイ  
ベントシーンに行けるんだ！）

そう言いながら選択決と睨めっこしていた。

(「Jの選択決か?いや早まるな。もしかしたらJたちの選択決かも  
しない。それともこつち?ああ、もうつ!……そうだ、今日の事  
を思い出せば何か分かるかも!」)

そして最初に戻る。

選択決

誰かが来るのを待つ。

「え？」

「おい、ちょっと待てよ。なんで勝手に選ばれてんだよ。おかしいだろ！でも何で、何でわざわざ今までなかつた選択決があるんだ。」

「まあ何もナイミタイだし殺しちゃオウか。んジャ行くヨ？精々避けテ逃げテ泣いテ喚いテ騒いでね？D陣? p展開lo iem魔法ent de l-? qui pe m a gique — Berlin Haupt b a h n h o f ! !

「ヤツベー！」

エルフが意味不明な言葉の後にファイヤーボール言ってから、エルフが前に突き出した手のひらには、アニメなんかでよく見る魔法陣が回っていた。すると魔法陣から大人の顔より少しでかいくらいの火の玉ができていて、それを俺に向かって！――

だがその瞬間突風がエルフと俺の間で起る。その後に見たのは

「あ……。」

闇だった。

黒い帽子に漆黒のマント、黒い、なんだ？あれ。変な模様が入った鎧と革鎧が合わさったようなもの。そして下も同じような感じ。靴

は黒いブーツのようなもので、すね当たりに折りたたまれた漆黒の羽があつた。

「そこまでだ、アルス。」

「おや、魔法剣士ノ。」

どうやら声を聞くと女性のようだつた。

「どうやら戦うしかなイよウテスね。」

「当たり前だ。」

「それでは本氣を出しますか。 Sommeil 大地に dans la 睡眠  
terre et de si 大地に grands 大精 esprits !  
Dormir dans le 空に ciel et 睡眠 telleme  
nt grand 精 靈よ ! D? ploiement de  
1' ? quipe 陣 magique ! 行け !  
「フン、 D? ploiement de 1' ? quipe 魔 ma

gique — Renforcement 《身体強化》 du co

rops

するところだけが嵐に包まれた。しかし、すぐに青白い光に消された。その青白い光は女性の体から発せられている。だがこれだけは分かつた。自分は助かつたのだと。あの女性が殺しに来るかもしれないが、一時的に危機は回避できたのだと。

(あれ?安心した、ら意識……が……)

そして俺は、殺されるかもしれないという恐怖と不安に包まれながら

ら意識を手放していった。

## 第一話 能力（後書き）

がんばるぜーちょーがんばるぜーだから見捨てないでください  
おねがいします今アナタが私を見捨ててしまった場合呪われますが  
よろしいのですか？えそんなことをいわれたから逆に見捨てる？そ  
んなあー！神は死んだ！

といつわけです。見捨てないでくださいお願いします。

## 第一話 アギト（前書き）

間人様管ですかかなり遅れて投稿。  
パソコンが使えなかつたんです許してください。

とこつわけで二話目

「ん  
ん  
ん  
」

目が覚める、朝みたいだ。

あれ? 知らなし天井た

「……知らないも何も、この家に貴様は一度も来ていないのだから、そうにきまつておるだろ？」

[ 3 ]

隣に美少女がいた。  
14歳くらいだろうか。  
中学生の身長だ。

周に見えてる。口先生へりいがのに思春期特有の部屋でにかい弁当の殻が数十個と積み上げられ、テーブルにはパソコンがおかれ、タンスにテレビ、そしてベッド（今俺が寝ている。いい香りが……。ハアハアクンカクンカ。ちよつ嘘だから振りだから通報だけはーーつ！）とまるで男子の部屋だ。

そして目の前にいる美少女。これが股（誤字ではない）、丸見えでシャツしか来ていなかつた。

つまりアレだよ、健全な高校1年生でまだ、思春期の僕たちには刺激が強すぎるんだ。

ア) 「ブオオオツホオオオオオオオオオ」(プシャアアアアアアアアアア)

『じつそつ様です。……』

ついでに言つと、その日死にかけるほどひの貧血になつた。

『脳内日記』

5/4(水)

一日たつた。病院に行きかけた。どうやらシャツだけといつ、家の  
中だけでしかできないオシャレ(?)はいつもの事らしい。だから  
俺が家にいる間は常に危険な状態であり、この家を出るまで警戒し  
つづけないと、もしかしたら理性を失つて一線を越えてしまい、大  
人の階段を15歳で上る事になるかもしないのだ。

「さて、話をしますぞ。」

「ああ、俺が今なぜこんな変態になってしまっているのか、だな。」

「違う。一昨日の夜、襲ってきた奴らの事だ。」

「……あいつらか」

今でも覚えている。まあ、当たり前か。エルフと褐色。殺そうとした相手の事を覚えていない方がおかしいだろう。覚えていない人がいるとしたらその人には、人間の脳にある防衛反応が働いているかだろ？

「んで、あれは結局なんだよ。」

「それはだな……」

「ちょっと待て！」

うわ～あつぶね。一番重要な事を聞くの忘れてた。

「お前何者だよ。ていうか何で一昨日の事知つてんだよ…」

「……そうだった。すまない、私がバカだった。警戒されるのも当たり前だな。」

「は？警戒？」

「どうした、気付いていなかつたのか。私と話している時、ずっと身構えていたんだぞ。ただの学生だと思っていたのだが……フフ、なかなかどうして、面白い。」

「へ？いや、絶対違うと思います。昨日と同じ過ちを一度起しきぬ

もうございました。ハイ。」

違つんだよ！アンタが破壊力高すぎるとんだよ！ていうか服着てくれよ、マジでお願いだからーー！

「さてと、私が何者なのか、だつたな。」

一  
あ  
ああ  
「

「それでは、自己紹介と行こうか。私の名前は霧裂きりさき零火れいか、『ゼロ』

「とそこへ呑んでくれ

セロジなんか二〇以上二〇みたいだな」「

みたいではなく、その通りだ。名前を知られる事は、弱点を知られる事にも繋がる可能性があるからな。

「弱点? なんだよ、それ。」

「フム、そこからは一昨日の奴らとともに説明をしたいのだが……。まあ、先に名前以外にも正体を教えなれば、な。」

正体？確かに、昨日の事を何故知ってるのか分かってないもんな。

「それで、正体なのだが、こつちの姿を見た方が分かりやすいだろ

「いつの姿？」

『我が半身よ』

昨日聞いたことのある感じの声だった。発音とかは違うけど、もつと根本的なところが一昨日のあのエルフの声と、どこか似ていた。

そして、霧裂さん  
か  
ゼロ、と呼んだ方がいいのだろう  
を中心として突風が吹き始める。次にそこにいた  
のは、一昨日見たことのある、

「あ……え……？」

闇を纏つていた。一昨日見たときと同じ姿形で、そこに立っていた。

「ひつ」

殺される。

そう思つてしまつた。だつて普通はそつだろ？魔法とかいう奴をバンバンと撃つたりしてないが、嵐を消したほどの奴が目の前にいるんだぞ？

選択決

何故かそばにあるナイフで刺し殺す。

ベッドの上にある枕をとりに行き、投げて逃げる。

何もしない。

せ、選択決か？おいおい、今度は究極の選択だな！どれもヤバいじゃないか。ナイフで刺し殺したら刑務所、といつかまず刺せるのか？あんな奴を？どうやって？

ベッドの上の枕？ハハ、とりに行つてる間に殺られるだろ。何もしない？ただ殺られてDEAD END一直線だ。

そう思い、もう一度ゼロを見ると

「あれ？萌え～？」

何故か、一次元になつていた。家も、家具も、何もかもが、だ。

「えと、選択決を選ぶときは、時間が止まつて一次元になる、つて」と?「

…………。

「完全なノベルゲームな空間じゃん、それ。」

呆然とその空間にただただ立つていた。すると、ピッ、と二つの音と共に、何もしないという選択決が勝手に選ばれた。

「え? おい、嘘だろ!」

もしやこれ、ノベルゲーム空間の中で選択決に入つてゐることをしたら、勝手にその選択決が選ばれんのか? それなら、昨日の勝手に寝るという選択決が選ばれたのも分かる。でも、このままだったら死ぬんじや?

ゼロを見る。よく見ると口が「う」にしている。もしや俺に死ねというのか。すみません、母と父よ。先立つといつ親不孝をどうか、許してください

「私は正体を明かした。次はそちらの番ではないか?」

「はい、分かりました。覚悟を決めました。」

「う、うむ。何の覚悟を決めたかは知らんがとにかく、何かを決めたのだな。」

「ああ、もう我が一生に一片の悔いなし。せめて、苦しまずに戦ってくれ。」

「……お前は何か勘違いをしている。」

「あれ、殺さないのか？」

「よし、殺そう。」

「うん、死のう。」

あの後、ちゃんと話し合って誤解が無くなつた。ゼロは俺を助けに来てくれたらしい。  
どうやらあいつは結構な悪者だとの事。詳しいことは今から説明してくれるらしい。

「そろそろ話しを始めるぞ。」

「ああ、分かった。」

「まず、何から話してほしい?」

「じゃあ、あのエルフ達が言つてたんだが、神々のゲームってなんだよ?」

「神々のゲームか。もつそこから全てを話してしまおう。それでは話を始める。」

なんか説明つて聞くとだるーくなるけど、頑張つて聞かないとな。

「まず、神々のゲームだが、エルフが放つた魔法を覚えているか。」

「ああ。」

「あれは、能力といつものだ。能力は

ゼロが言った話はこうだ。

人間をいつも神々は見ていた。神々は毎日に飽きていた。生命の数の管理。アカシックレコードに生命が至らないための管理。神はそれぞれ仕事が決められていた。が、反対に言つてしまえば、それ以外はすることがなく、毎日それしかできないのだ。故に神々は毎日に飽きていた。

そんな中、暇を見ては下界、つまりこの世界をのぞいていた。そしてお気に入りの人間を見つけては、幸運や加護を与えていた。その加護が能力である。

だが、とある神が娯楽少ないということで、ある遊びを提案した。それがGAME。加護を受けた能力者たちに戦わせる殺し合いであった。

能力は多種多様。加護を与えた神によって変わつてくる。エルフは魔法の神に加護を与えられ、その代償にエルフとなる。特典は魔法の才能とぼうだいな魔力である。

あの褐色肌の女は影の神に加護を与えられ、その代償に色彩などに変化が起きた。特典は影に関することならばどんな事でも使える、影を薄くしたり、影縫いを使えたり、などである。

俺の場合娯楽の神に加護を与えられた。戦闘に関する能力はほぼ皆無である。才能があれば魔法なんかが使えるらしいのでよしとするが。

ゼロは戦の神だ。戦闘に関することならば、ほぼ万能である。その代わり飛び出た能力はないらしい。

「それは、なんとまあ

「「ちょー迷惑な話だな（だらう？）」」

「ていうか殺し合いってことは」

「ああ、神がRPGのよつにGAMEをセーブ、つまり一時休戦させるか、神に飽きさせるか、GAMEをクリア、つまり最後まで殺し合いを続けるかしないと、この殺し合いはおわらない。」

それって、すぐヤバいんじゃ。

「私の家はここだが、本当は地下に国会議事堂程の大きな家をつくっている。」

「…………それって家とは言わないんじゃ…………。」

「ああ、そうだ。暗証番号に指紋確認、専用カードを通さないと入れず、正しいルートを通らなければ、警報が鳴り、壁に仕込まれた重火器が牙をむぐ。ここには、私が助けた能力者が5人ほどいる。そのために私たちはここをいつも呼んでる、アギトと。」

「アギト…………？アギトじゃなく？」

「ああ、最初はアギトと呼んでいたのだが…………一人がアギトといい始めて…………な」

「その人の名前は？」

「…………もう、死んだよ…………」

「うつ、氣まずい…………。こんな時、どうするかなんて俺わからんんですけどオオオオ！！」

「まあ、それはともかく、だ」

「あ、はい。」

よかつたー、あつちが仕切りなおしてくれたよ。

「お前も」のアギトに入らないか？」

「え？」

俺がアギトに入る? といつ」とは毎日」のベッドの香りをクンカク  
ンカで。……ゲフングフン、学校に行けない? 最高じゃないか!

「でも、いいんですか?」

「ああ。それにお前能力者とは戦えないんだろう?」

「それがどうかしたんですか?」

「……お前、先ほどの話をちゃんと聞いていたのか?」

「ええ、もちろん。」

「なら、何故わからない。戦闘技能を持たないお前は、殺し合いで  
真つ先に狙われる可能性があるんだぞ?」

「あ……」

今氣付いた。あれ? この場合俺アギトに入らないと、死亡フラグ満  
載のスリル満点生活ルート一直線じゃ!?

「入ります! といつか是非入させてくださいお願ひします! ! !」

「う、うむ。」

「許可してくれんるんですね? ありがと! ゼロ様! ! !」

「……そうと決まれば、今日のうちに他の五人と会つておくれか?」

「はい。」

「よし、じゃあ付いて来い。」

そう言つて、ゼロは部屋の扉を開ける。すると、部屋の外は鉄の様なもので作られており、学校の廊下の様な一本道がずっと先まで続いていた。

「えつどどこまでですか？」

「この廊下を渡りきつて右に曲がり、そこからここに向かう廊下を」

「こや、もうこいです……」

「やうか……すまないな、敵から身を守るためにこまといつでもしないと無理だったんだ。」

「いえ、ちゃんとした理由があるな……」

「じゃあ、行くぞ。」

「……はー。」

覚悟はしたが、やはりこの先が見えない廊下を渡つるとなると、げんなりとしてきた。

「トトトト」と鉄のようなものでできた床と靴の衝撃で音を鳴らす。

ようやく一つ目の廊下の終わりが見えてきた。

「……からまた今のと同じようなところを……いつかノイローゼになつたりしませんよね？」

「人いたな……そういう奴が。」

「うつそーん！－」

「大丈夫だ、迷子にさえならなければ、な。」

「…………もつと怖いんですけど迷子になつたらいどうなるの？」  
いましょう？

「死ぬな。」きつぱり

「…………」

「ついでにその迷子は秘密の通路に入り、重火器でハチの巣にされ  
かけたな。」

「…………もう何も言いませんよ、ええ…………」

「ここに5人がいる。」

「分かりました。」

ゼロと俺が立っているのは赤い金属でできた扉の前だ。

「少し前から思っていたんだが、敬語は使わなくていい。なんと言  
うのか、むずむずする。」

「いや命の恩人ですし……」

「いいからやめる。」

「はいわかりました、分かった。」

「よし、では入るぞ。」

ゼロが扉を開けるとそこには

「は……？」

呆けた声を出したのは誰だつたか。

「あ、来たみたいだよ。」

「ワオ、ゼロが言つてた新しい仲間つて立花くんの事だつたのね。」

「おつす、オラ悟空、新たな仲間が入りましたー？」

「どうして疑問なんですかー？」

「何でおまえがいんのさ、立花。」

「ちゅう、それはこいつちセリフだよー。」

そこに居たのは、小学生からの付き合いである俺の大親友井上 祐樹と、小学生の時知り合い、中学生の時受験する学校が違うということであうことのなくなつた、有本 美波だつた。他に、細田の女子、チヤラい男、許そうなメガネっ子がいた。

「なんだ？ 知り合いか？ まあいい。酒を飲むぞ」

「は？ 何て言ったのかよく」

「酒を飲むと言つたんだ。」

「えと、僕たちまだ未成年なんですけど？」

「知るか飲め。」

そつ言い一升瓶の口を俺の口に近付けてくるゼロ。

「ちょっとやめ。」

「ほれほれ～飲むぞ飲むぞ～」

「この人……酔つてるな！」

「まあ、先に自己紹介だな。簡単にすませる、能力なんかは後で言え。」

「俺の名前は立花 九です。新入りなので迷子にならないように見張つといてください。」

「 「 「 「 「ああ……あの話を聞いたのか……」 「 「 「

皆も聞いたんだな……。

「じゃあ、わたしからね。わたしの名前は近藤 三輝<sup>いんとう みき</sup>つて言います。  
よろしくね。」

「よろしく  
「俺の名前は田嶋 隼貴<sup>たじま じゅんき</sup>だ」

そう言つと田嶋は「」と叫<sup>さけ</sup>つた。

「一つ聞くが、漫畫は好きか？アニメは！小説は！？」  
「大好きだつ……！」  
「「回志<sup>かいし</sup>よー……！」」

男の握手をする。「」の時、俺と田嶋にしか見えない同士の絆<sup>なづな</sup>がしつかりと繋がつていた。

「私の名前は亀賀 音遠<sup>かめが ねおん</sup>ですー。」

「かメガネおん？」  
「かめが ねおんですー！」

そんな風にふざけて「」と、

「井上 祐樹<sup>ゆうじゅ</sup>だ」  
「知つてるわ！」  
「有本 みなみ」  
「知つてるよ！……」

「終わったか～？んじゃ飲め。」

「へっ？ゴブゴボゴボゴボゴボ。」

ちよつ…………息が…………できな…………

「待て」  
「嫌だよ待たないよ、ていうか来んなよ  
「待つて待つて待つてbギヤツ」  
「

「え？」

そこには血がついたナイフを持つた男と、血だらけの

なんだ今の……？夢、だよな……？そり、夢だ、でもなんであんなにリアルだったんだ？

「どうかしたか立花！？」  
「いやなんでもない。」

「本当か？」

「ああ……」

様子を見に来たのは井上。心配して来てくれたようだ。

「じゃあ、行くわ  
「さあ、行くつてどう」「  
「ああ、ひだり  
「ああ、ひだり

「学校だよ」

「ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
！」

「うつせえ死ねだぼ！」

「ぐぼあ！」

あれ、何で触れてないのに？

「俺の能力だよ。」

「なつ心を！？」

「そ、俺は風の神の加護。風に威力を乗せて当てたんだ。」

「うつわすつげえ便利じやん。」

「ああ、とにかく学校行くぞ学校。」

「今ぼくちんやられたから動けないや。」

「そつか、なら背負つてやろう。」

「いえ動けますともええ本当に！」

「本当か？無理しなくていいんだぞ？」

「ヤーヤしながら」いちに向かってくる井上。想像してみろ、男が男を背負つて登校している図を最悪だぞ？

「さてがつ」うごくか

そう言うと俺はカバンを持って出て行つた。

「あ、あこつ迷子にならなければこゝに来い

選択決のおかげで迷子にならはずに済んだ。

第一話 アギト（後書き）

頑張る。ただそれだけ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2128y/>

GAME（ゲーム）～神々の遊楽～

2011年11月20日14時00分発行